

---

# 魔剣 VS Bowline

蓮&恭一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

廃剣 VS Bowling

### 【Nコード】

N4262U

### 【作者名】

蓮&恭一

### 【あらすじ】

廃部寸前剣道部と時任恭一さんのBowlingのキャラクターとのコラボ作品です！

少し本編からは時間軸がずれています。これはある意味番外編なので、本編とぐちゃぐちゃにならないように！

主に恋愛をメインにしているので、普段見ることの出来ない廃剣のメンバーが見られます！

時任恭一さんのBowlineは少し過激な恋愛と人間関係、男女の深さを思わせる作品です！ちょっと大人な恋を見ることが出来ますよ！

ぜひ見てみて下さい

これはお互い交互に書いているので、文章や視点がコロコロ変わりますがご了承ください。

## 大我 vs 由美（前書き）

今回は大我のところにBowlineの由美が来て、意気地なしの大我にアドバイスをします！

由美の巧みなテクニックを御覧あれ！

由美 Bowlineの女キャラです。とっても美人でスタイルもよく、男の扱いに慣れており、不器用な親友のアドバイザーでもある。みんなの姉御的存在！

この作品はコラボ作品です。お互い交互に書いているので、文章や視点がコロコロ変わりますがご了承ください！

## 大我 vs 由美

双子と妹を風呂にいれ、寝かせ着け終わるとやっと自分の時間。さつきまで椿と風香と元がリビングで遊んでいたが椿と元は約一時間前に帰った。風香は晩御飯まで食べて30分前ぐらいに帰って行った。

少し濡れた髪をタオルで拭きながら廊下を歩く。

どうにも最近風香ときこちない感じがする。小さい頃はもっとナチユラルに話せたのに、今はなんだか素直になれない。

ため息をつきながら自室の扉を開ける。

「……………はあ？」

そこには見たことない女がベッドでくつろいでいた。

「んな思ってるだけで、空想の世界で勝負なんてできないよ？」

いつの間にか、大我のベッドの上に陣取り、あぐらをかく由美。

この坊やなら、パンツくらい見えたってどってことないや。後ろ手を着くついでに大我の部屋を見回し、机に立て掛けられた竹刀を発見。

「あんだ、剣道やってんだ！？ 勝負師なら、惚れた女に当たってきなさいよ」

「なんだよ！ なにが当たってこいだあ！ ってか、なんで俺の部屋にいんのお！？」

竹刀を構えながら由美に威嚇。しかし、由美は動じないし、パンツ

見えて赤面。目を反らしながら由美の動きに注目しす。

「Bowline。私以外、皆ラブラブだからさ。面白くないから、廃剣に男探しに来ただけけど…無駄足だったかもねえ」

「だからって、なんで俺の部屋にいるわけ？ 元のとこ行ったら喜んでお相手してくれるんじゃない？」

「私ねえ…。女慣れしてる奴の相手すんの疲れちゃったんだよね。女にまるで慣れしてないスポ根君って、どんなのこなってチラツと寄ってみただけ」

「スポ根君って…残念でした、俺は恋愛には興味ないから。元は女に慣れてるってことはねえよ…モテねえもん」

大我、以外に毒舌

「じゃ、皆モテないんだ？ しょうがないなあ…。趣旨変更。まずは、あんたをモテるようにしてあげるよ。風香ちゃんだけ？ 可愛い子だよねえ。恋は剣道と一緒に。うかうかしてたら取られるよ。タケルや雄二みたいなニヤけた奴にさあ。いいの？ 剣道少年？」

大我のパジャマの襟を直す由美。女の子から接近戦。上目遣い攻撃に咳払いするのがやっとの大我。その竹刀も意味をなさない。

「風香に限ってそんな！？ って言いたそうな顔してるねえ。モテない奴の典型だよ。女の子の事を勝手に決めつけて、一人よがりばつかな奴。女の子ってのは風に香る花のようなもん。風向きが変わればその香りも方向を変える。風に香る…。はい、略して？」

「風香……？　つてか、別に俺、風香を狙ってるわけじゃねえし……単なる幼なじみなだけだよ。あいつが誰と付き合おうが告られようが別に、どうとも思わねーよ。」

由美から顔を反らし、自分で襟を立て直す。

風香以外の女子に近づかれた事の少ない大我にとって由美の接近戦は難しい事だった。

くそっ、剣道の接近戦は得意なのに……

「それに……風香はなんか好きな奴いるって元が言ってたし……」

竹刀を竹刀袋に納めながら小さく呟いた。

大我のベッドに腰を掛け、由美は後ろ手を着く。どうして男はやせ我慢を美学だと勘違いしてる奴ばっかなんだろう？　溜息を天井に上げた。

「想像した事ある？　風香ちゃんが他の男とラブラブしてる姿を。そんなの遠目で眺めながら生きて行けるの？」

大我がゆっくりと由美に振り向く。今度はパンツ見えてないんで大丈夫だ。

「風香ちゃんに好きな人がいるかどうか本人に聞いてみた？　元が本人に聞いたの？」

また、大我は顔を反らして俯く。ベッドから後ろ手を外し、立ち上がる由美。また大我の傍に寄る。

「風香のその好きな人って言うの……あんたじゃないの？　なら、逆

に、あんたが風香を待たせてるって事になるよ」

訳の分からない女にそう言われて初めて考えてみる。

今までいつもなにかと風香は一緒にいた。それが当たり前だった。

「別に……あいつが誰とイチャつこうが俺には関係ねえし、どうとも思わねえ。それに本人に聞くも何も……風香も年頃の女子だし、それくらいいるだろ……」

俺は近づいてきた由美の目を見ることが出来なかった。

嘘をついた。意地を張っている自分がいる。

今までずっと隣にいた風香がいなくなり訳の分からない男の隣にいるのが少しムカつく自分がいるのは確かだ。

「それにあいつの好きな奴は俺じゃねえよ……」

勉強机の椅子を手前に引いてドカッと力なく座る。

俺は自分の気持ちがよくわからない。俺は風香をどうも思っていないのに、何でムカつくんだ？

こう言う素直じゃない奴は私の周りにもいる。扱い方は慣れてるつもり。大我の前にしゃがみ、由美は大我を見上げた。

「じゃ、何で、そんなに怒ってるの？ 顔に出てるよ。どっかに鏡あったら見せてやりたいねえ。あんたの顔。風香の事を考えてイライラ来るのは風香の事が好きで好きで堪らない証拠。昔、タケルに言った事と同じ事をあんたに言ってるよ。素直になんな。素直になるのは勇気がいるけど…それは、相手の為でもあるんだよ」

大我がまた咳払いをして目を反らす。



ん？ 胸元をに目を落とすと、第二ボタンまで開けた制服のブラウスからピンクのブラがチラリ。勘弁してよ。これくらいでさあ。頭を掻きながら立ち上がり、由美は大我の机に腰を着けて腕組みする。

「あんだ…。今度、いつ部活休み？」

俺、そんなに顔に出てるかなあ？ しかし、自分でもどう思っているか、どうしてイライラするのか分からない。

俺が風香が好き？ いやいや、それはない！ だって、風香だけ…昔から一緒にいて、妹みたいな存在の風香を俺が好きだとお？

「素直って、俺は至って素直だよ。風香は妹みたいな存在だし、恋愛感情はわからないよ。実際風香と元が話しても、イライラはそんなにしない…。」と思うし…

ああ、休みは今週の日曜日だけ。休みの日が何か関係あんのかよ…。」

机に腰掛けた由美を見ながら小さく首を傾げる。

元と風香が話してて、イライラしないのは小さな嘘。初めは少しイライラしたが、元から「春月、好きな奴いるんだってえ」とニヤニヤしながら言われてからはそんなにイライラしなくなった。とりあえず、元ではないみたいだし」

大我の机からピョンと飛び降りた由美。

「イライラはそんなにしない…。」と思うし…？ その微妙な言い回し。あんたの心の中が透けて見えるよ。あんだ、タケルと一緒にわっかり易い。浮気なんて絶対できないタイプだね。大体、妹みたいな存在るのが好きな存在って言ってるようなもんだよ。私みたいなお姉ちゃんタイプは至って男ウケよくないからさ」

頭を掻く大我の前に、由美はまたしゃがみ込む。大我はまた困った顔をして顔を反らす。

「日曜日。OK！ 風香を誘いなよ。どうせ、休みの日なんて暇でやることないでしょ？ 今の季節ねえ…。涼しげな所がいいんじゃない？」

反らした顔を再び由美にやると笑顔で笑いかけた。

そんなに分かりやすいかあ？ 浮気をする気はさらさらないけど、やっぱり出来ない…。かな？

「でも、風香は…。きつと、俺じゃなくて違う人が好きなんだよ…。俺には絶対話してくれないし…。」

小さな声で由美に呟く。

そっだ、いつも椿や元には話すのに、俺には話してくれない。

「はあ！？ なんでそんなことしなきゃなんないんだよあ！」

立ち上がった由美はケラケラ笑いながら大我の肩に手を回す。芳しい香りに包まれる大我。由美にとっては普段のスキンシップでも、大我にとっては普段ではない刺激。

「大我君…。女の子は本当に好きな人に面と向かって『好き』なんて言えないもんよ。常に、気付いて欲しいの。特に、風香みたいに普段明るいタイプの女の子はね。風香はあんたに『好きな人がいる』って言わないでしょ？」

ポンポンと大我の肩を叩いて一呼吸つく由美。

「少しづつ距離を縮めていってあげな。あなたの為に言ってるんじゃないよ。同じ女の子として…。風香の為に言ってるんだ。土曜までにちゃんと誘いなよ」

肩に手を回された由美の手を払い少し引き気味になる。

「気付いて欲しい？ ってどういうことだよ……そりゃ、あいつは俺には聞いてこないけど……」

由美の言っていることの意味が分からないし、興味もある。

「土曜日までって……どうすればいいんだよ……」

長い髪を掻き上げて、由美は笑顔を漏らす。どうやら、大我は興味を持ち始めた様子。まんざらでもないじゃない。

「風香は…大我の事を好きな気持ちを大我自身に気付いて欲しいの。あなたに何も言わない、聞かないのは、あなたに自分の気持ちを分かかって欲しいから。でも風香は優しい子だねえ。元に『好きな人がある』って言うって…遠回しにあなたに伝えてるんだよ。『早く私の気持ちに気付いて』ってね。これが彩みたいなタイプなら、イライラしてあなたに喧嘩しかけてるよ」

俯く大我に近寄る由美。由美の気配を感じ、大我は顔を上げる。薄ピンクのブラウスがヤケに眩しい。

「じれったいあなを、風香はジッと待ってるんだよ。どうやって誘うか？」

由美は部屋を見回し、タンスの下に転がる大我の携帯を発見。

「善は急げじゃん」

妖しく笑った由美は大我の携帯を拾い上げる。

「気が付いて欲しい？ どういう意味だあ？ よくわからないんだけど……あと、一つ訂正。風香は優しくない。」

俺はとりあえず指を由美に向ける。

風香が優しいと言ったら世界中の女子が優しいことになる。それに俺、じれったいか？

由美が渡してきた携帯を静かに受け取るが、なかなか開くことが出来ない。なんて言えばいいんだよ……

「あの子を優しくないって評価したら、あんた、世の中生きていけなくなるよ。世の中には私みたいな女いっぱいいるんだからさ。気付けて欲しいの意味教えてあげるよ」

分らず屋の大我には荒治療が必要。再び大我のベッドに腰を下ろした由美。

「その携帯持って、こっちおいで」

由美はベッドをタップして大我を呼ぶ。

「そんなことなんでわかるんだよ。女子って怖ええ……女子って、男には全く気が付かないこと気が付くんだよね」

ん？ なんだよ、お前がメールしてくれるのか！ 助かる、俺なんてメールすればいいか分かんなかったんだ」

俺は少し女子を尊敬しながら携帯を持って由美の前に立って携帯を渡す。

「誰が、あんたの代わりにメール打つって言った？」

膝上のチェックのスカートに生足。後ろ手を着きながら薄ら笑いを浮かべ、足を組む由美。大我を見上げる。また胸元からチラリ。しかも、今度はベッドとコンビ。初めてのシチュエーションに、大我は頭を掻いて目を反らすのが精一杯。

「じゃあ、なんで携帯貸せなんか言ったんだよ……それと、女がそんな露出するのは……その、駄目だと……思う……」

俺は携帯を片手に人差し指で頬を掻く。よく考えると風香以外の女子と2人つきりになるの、初めてかもしれない。目のやり場に困る。

「露出？　んなの私してないわよ！　至って制服の私だよ。いいから座わんかって！」

じれったい大我。由美は大我のパジャマの裾を引っ張り、無理矢理、大我を隣に座らせた。一回、クラブ連れてって鍛えてやるかい！　この野郎。

「うお！？　いきなり引っ張るなよ！　分かったから、座るから、寝間着離せ。」

由美に引っ張られ、少し空間を空けて横に座る。

こいつ、こんな細いのに意外に力強い……

「だから、あんたが風香に電話すんの！」

大我の腕に自分の腕を絡める由美。当然、胸は大我の二の腕に密着。

「ちよつ！？ なつ、なんで引つ付くんだよ！？ 分かった、いや分からないけど、いいから離れる！」

大我は顔を真っ赤にしながら由美の腕をほごうと体を横に傾ける。なんだよ、なんかペースが乱れる。

「何て事ないでしょこれくらい！？ 何、ビビってんのよ。試合の時はまあまあ格好いいのに、全く、女には慣れてない奴だね」

何とか、由美を振りほどいた大概。由美は呆れ顔で溜息。

「これと試合とは全く別だろ！ それに女に慣れなくて普通！ タケルとかが変なんだ！」

「タケルねえ……？ 別に、あんたにあそこまで過激になれって求めてないけどね……いい大我。あんたが何気に風香に電話するの。話題は部活の事。学校の事。元達の事。何でもいいや。で、私が風香に聞こえるように『大我君、誰に掛けてんの？』って感じで隣で喋るの」

なんとか由美の腕を振りほどいて由美から少し距離を置く。

この女といたら心臓が保たないって……

「俺も求めてねえよ。っで、電話するのはなんとなくわかるけど、お前のセルフの意味が分からん……そんな事したら風香勘違いすんじゃない……」

両手を膝の下に潜り込ませた由美は大我に上目遣いを浴びせた。

「風香があんたの事を好きかどうか、チェックするだけで。もしそれで、風香が腹立てて電話切れれば、あんたの事を好きって事じゃん」

そんな上目遣いされても……

正直由美の上目遣いが風香とかぶる。なんだか、風香にお願いされてるみたいな感じだ。

「でも、それで勘違いしたままにしたらヤバくないか？ それにあいつヤケになると怖いぞ……」

そういえば、あいつが小学校のとき運動会で俺と椿に負けたことでヤケになって三人分のお弁当全部食べたことがあったな。その時のあいつの顔、パンケーキみたいに膨れてた。それを思い出したらちよって笑えた。

しめしめと妖しい笑顔を浮かべた由美。

「大我君……」

お尻を滑らせ、大我との間隔を縮めた。

「何で、そんなに風香の事を気遣うの？ 妹みみたいな風香なら……」

別に、お兄ちゃんのおんたが女と仲良くしようが関係ないじゃない」

大我の耳元に、由美の甘い息が当たる。

「素直に…なんなさいよ。分かったら、素直に、自分でメールなさいよ。『今度の日曜日…水族館一緒行かない？』てね」

そう由美に言われてドキツとした。っていつか、近いよ。

「別に、気を遣ってるわけじゃなくて…その、あの…幼なじみのだな…」

たしかに、同じ幼なじみの椿に彼女が出来ようが、彼女がいると思われようが正直どうでもいい。でも…

「なんか、風香には勘違いされたら困るっていうか、嫌だというか…よくわかんないけど、とりあえず、あいつに嘘はつきたくない…」

由美の目を見てちゃんと言う。これが俺の本音。あいつとは物心ついたときからずっと一緒にいるからこそ、嘘はつきたくない。違う。その嘘であいつを傷つけたくない。

「分かった。自分からメールするよ、誘えばいいんだろ。ってか、なんで水族館？」

コクリと、由美は頷く。女の子に接近されるのにも…多少は慣れた様子の大我。これでよし！

「別に…どこだっていいんだけど…。映画は上映中、仲良く喋れな



いい。あんた、見た感じ、ジェットコースター苦手そうだから遊園地は無理でしょ。なら…水族館が一番無難かなって思ってたね。水族館。女の子喜ぶよおおお！」

大我の膝を揺らすと、由美は大我の携帯を取り上げ、開けた。

「はい、メールなさい。間違いなくOKだから」

由美は携帯を大我に差し出した。

由美に渡された携帯を操作し、新規メールを作り宛先を風香にする。ここまでではすんなりいく。しかし、本文を開くとどうも上手くない。ない。

「たしかに水族館は無難だけど…まだOKくれるかわかんないじゃん……」

くそっ……なんでメールだけでこんなドキドキしなきゃなんねえんだ！？

親指が止まった大我。由美はまた後ろ手を着いて天井を見上げた。

「大我。あんた、風香にメール打った事ないの？いつものようにメール打って。最後に、『あ、そうだ！今度の日曜、部活休みだから一緒に水族館行くぞ』で、いいんだよ。必ず、一分以内にOKの返事が来る。最後に『？』マークは付けないでね。ほら打て」

体を起こしついでに、由美は大我の背中に気合いを入れた。

「必要以上にメールしないからな……」

由美に背中を押され、頭を掻き少し考えてメールをうつ。

『よう、日曜日水族館行かないか？』

うん。我ながら上手くいったような気がする。

「これでどうだ？」

由美は大我の携帯に顔を近付ける。

「うーん」

リンスの香りが由美の髪からふわりと上がった。

「？を着けずに、強引に『行くぞ』の方がいいんだけど……。ま、ビギナーだから仕方ないね。これでいい」

「じゃあ、そ…送信します……」

あれ？　なんで俺、敬語になってんだよ……  
指が震える。なかなか送信ボタンが押せない……

由美は額に手を当てる。ダメだ！　ラチが明かない。

「もう！　あんた、じれった過ぎ！　携帯貸しな！　私が押してやる」

由美は大我の携帯に手を伸ばす。大我は慌てて携帯を引っ込める。

「大我！　こら！　貸せ！」

ベッドの上で大我に覆い被さる由美。暴れる大我に、由美の胸が密着する。

「つて、離れる！　当たってるから！？　離れるよ！」

携帯をポケットにしまいベッドから飛び降りる。由美はため息つきながらベッドの上で胡座をかいている。つたく、この女……一息ついてから携帯を開くと液晶画面には『送信しました』の文字が……

「……………送っちゃってるうう！？」

「OK！」

ベッドから飛び降り、由美は大我に歩み寄る。

「これで…直ぐに返事来るよ」

啞然と口を開ける大我。由美は大我の肩をポンポンと叩いた。

「じゃ、私帰るから。あんまり、留守にしちゃ、タケル達寂しがるからさ」

「つて、おい！　返信きたらどうしたらいいんだよ！？」

部屋の扉へ向かう由美の肩を掴み引き止める。

なにがOKだ。俺は全然OKじゃねえ！　もう心臓破裂しそうなんだよ！

「大我……」

呆れ笑いを浮かべながら、由美は大我の頬を撫でる。まるで催眠術。由美の肩を掴んだ大我の手が揺るんで落ちた。接近戦はまたもや大我の惨敗。

「必ずOKの返事が来るから安心なさい」

ペタペタと由美が大我の頬を叩くと、大我の携帯が振動。着信が入った。

「思ったより早い返事だね。さっ、開けな」

細く繊細な手で頬を撫でられ体が動かなくなった。女って……怖ええな。そんな力があるのかよ。

手の中で震える携帯の液晶画面には「風香」と表示されている。わざわざ電話にしなくても……

このまま切られると目の前でにやけている由美にキレられそうだし、出なきゃ……

通話ボタンを力なく押す。

「は……はい……」

やや体をくの字にし、笑いを堪える由美。わざわざ電話してくるなんて可愛い過ぎだよ。OKだから電話してきたの。後は、大我がバシッと誘えばいいだけ。由美は大我の胸をパシッと叩いた。

「あの……だから、日曜日に水族館に……どうかなって思っただけだよ。……え？ 椿？ いないよ。俺の単独だよ。……わかった。……」

…じゃあ、また日曜日に……」

耳から携帯を離し、電話を切る。

「おめでとう。大我」

由美の声に大我が振り返ると、由美はもうそこにはいなかった。

大我 vs 由美（後書き）

初めてのコラボ作品どうでしたか？

書いている私たちは楽しかったです〇（＾－＾）〇

こんな作品をこれからもたくさん作りたいです！

次回は風香の悩みをあいつが聞いてくれますよぉ〜

風香 vs 雄二（前書き）

今回は風香の悩みを雄二君が聞いてくれるようです。

さあ、女の子の扱いに慣れている雄二君は風香にどんなアドバイスをするんでしょうか！

御覧あれ！

雄二 Bowlineの男キャラです。主人公の親友であり、なかなかのイケメン（笑）

いろいろな女と遊んできたが、今はたった一人の人を愛している。

これはコラボ作品です。

お互い交互に書いているので、文章や視点がコロコロ変わりますがご了承ください。> (一一) <

風香 vs 雄二

「はぁ……」

昔馴染みの公園のベンチに座りため息をつく。部活が終わってから少ししてから公園だ、もう子供はいない。小さい頃大我と椿とよく遊んだこの公園を見渡す。

(こんなに小さかったっけ?)

「可愛い子にため息…似合わないよ」

声の方に顔を向ける風香。会ったことも見たこともない男の子が両肘を同じベンチの背もたれに掛けて座ってる。

「何、見てんの？ やっぱ俺ってそんなに格好いいかな？」

「あの……どなたですか？ あと、格好いいかどうかは……」

いきなり話しかけられ、しかもなんかちよつとナルシストの男の子に……これってナンパ、なのかな？

椅子から立ち上がりスクールバックを抱えてちよつと構える。

「あついやいや！ んな怖がらなくても…。俺…雄二って言うんだ」

ブラウスの第二ボタンまでキツチリ閉めて化粧けもない、こんな子に、息なり声掛けたら引かれる。由美から真面目な子なんで気を



付けてねって言われてた。頭を掻く雄二。

「こ、これ間違ってもナンパじゃないから。は、話せば…複雑な話  
なんだけどさ。俺：由美って子に君と話してこいって言われてさあ」  
雄二君は私に静かに笑いかけた。とりあえず悪い人じゃなさそうか  
も。

「雄二君？ 大我の友達かなにか？ だったら今は話したくない。  
それに由美なんて人、私知りません。」

そう言いながら雄二君の隣に座り直す。

由美が何故、俺をここに送ったかよく分かる。もしタケルなら、  
風香に引かれた時点で、「ああそうかよ」って逃げちまう。智喜な  
ら…。ま、あいつは顔見られただけで相手に逃げられちまう。思え  
ば、美紀との出会いも、美紀のドン引きから始まった。由美は、先  
ず風香が引くって読んでたんだ。引かれた相手呼び戻す。それが  
俺の得意技だって、由美は分かってたんだ。「可愛い子と喋って来  
て」。由美の言葉に一瞬ニヤけた俺だった。そう言う事が。苦笑い  
で、俺は髪を掻き上げた。

「俺は大我の友達じゃない。ま、大我と由美は友達同士かもしれな  
いけど…」

俯いていた風香がキリツと瞳を上げた。「大我と由美が友達」。  
その言葉に風香が反応した。大我の事：まんざらでもなさそうだな。

「安心しなよ。俺も由美も現実には存在しないんだ。由美の気まぐ  
れが原因で別世界から遊びにきただけさ。だから、仮に大我がいく

ら由美の事が好きでも、二人は付き合えない。君がいくら俺を好きになっても、君は俺と付き合えない」

雄二はそう言いながら外人がするように首をすくめた。

大我が由美とかいう子と友達で、その友達が雄二君。

「あの、よく意味がわからないんですけど……それに違う世界って？ 大我がその由美って子好きなんですか!？」

雄二は腕組みし、空を見上げた。

「要するに……。普段は住む世界が違うけど、悩んだ時はお互い様つてやつさ。世の中には色々な高校生がいる。たまにはタイプが違うもの同士の方がお互い新鮮なアドバイスをし合えるって事あるだろ?」

肘をベンチの背もたれに戻した雄二。風香に笑顔を向けた

「俺には…君に負けなくらい可愛い彼女がいる。だから、ナンパなんてしないよ」

分かってくれたのかどうか？ 漸く、風香が笑顔をこぼした。

「それに…大我は由美を好きじゃないし。由美は…大我を弟みたいに思ってる。安心しなよ」

風香の肩を軽く二回叩いた雄二。軽いスキンシップに慣れていない風香が雄二を睨み付ける。ヤベ！ ついつい、由美達と話してる時の癖が出ちゃった。

「そ、そう。俺達はこう言う感じの高校生。普段は、風香達とかけ離れた存在さ。由美もこんな感じなんだよ。大我みたいなタイプは苦手だろ？ 由美みたいなタイプ」

口に手を当て、再び、風香はクスツとこぼした。

アドバイスをしあえる存在か。なんだか分かったような分からないような感じ。でも、気にしないでおう！  
それに雄二君悪い人じゃなさそうだし、なんだか安心する。

「可愛い彼女さんを置いて私なんかのところに何しに来たんですか？」

スクールバックを膝に乗せてベンチの背もたれに寄りかかる。だつて、たとえ頼まれたからつて雄二君みたいな美形な高校生が私のところに来るわけがない。

それとも、私の悩みなんかを聞いてくれるのかな？

風に靡いた髪を耳に掛けた風香。まだ恥ずかしいのだろうか？  
若干視線を下げて微笑む。フローラルな髪の香りがその風に乗る雄二の臭覚に入り込む。風香があ…。その名前にびったりつて、いかんいかん！ 首を小刻みに振る。「言つとくけど、1ミリでも変な考え起こしたら美紀にチクるからね」。ニヤけた俺に釘を刺した由美の怖い顔を思い浮かべる。

「と、当然、悩み事を聞きに来ただけだよ。溜息は何の解決方法にもならない。吐き出さない」と

普段、喧しい女に囲まれてると…新鮮だね。こう言う子は…。いかんいかん！ まだ小刻みに首を振る雄二。

私の悩み、か……

確かに吐き出した方が良くかもしれないけど。

でも、雄二君ならいいかな？

彼女さんもいるし、いいアドバイスくれるかも。なんか小刻みに首振ってるけど……

「あのね……今日、大我と喧嘩しちゃったの……別に気にしてるってわけじゃないんだけど、やっぱり気が重くて……」

雄二は遠くを見詰めた。

「喧嘩か……。仲が良い証拠じゃん。俺の親友でタケルと彩って奴らがいるんだけど、そいつらも喧嘩やりたい放題の仲だったよ。そいつら今どうなってると思う？」

雄二君はにやにやしながら私を見た。

「喧嘩仲間ってことですか？ どうなってるんですか？」

鷹虎君と元君は喧嘩仲間だけど、仲がいい。そういう関係かな？

「ラブラブのカレカノ関係さ。あれは好きあってるどころじゃねえよ。愛し合ってる。良かったら……その付き合いの内容言ってやろうか？」

雄二はニヤニヤしながら、風香に軽く指を差した。

喧嘩仲間がカレカノ？

そんなカップルあるの？

「仲がいいんでしょ？ そりゃいいカップルなんでしょ〜今後の参考に聞きたいな〜」

躊躇すると思ったけど、聞いたそうな風香。言ってしまったからには仕方ない。フツと笑って、雄二は内容を始めた。みるみると赤らむ風香の顔。風香は視線を下げてスクールバックを強く握る。まだまだ、序盤の方だけど、もう限界だな。

「てな感じで、ほぼ毎日のように愛し合ってるよ。あいつら」

聞くんじゃなかった……

顔が熱い。そんなこと高校生はやってるの……でも、その彩って子は毎日幸せなんだろうな……思いが届いて、いつも一緒にいれて。

「あの……雄二君。私が好きな奴はとっても鈍感でバカで私の気持ちに気が付いてないの。どうしたらいいかな？」

由美から聞いた話じゃ。大我も相当、風香が好きって話。全くタケルと彩と一緒に。タイミングが合わないだけ。にしても、その大我って野郎はこんな可愛い子ほっときやがって……。んなんなら、俺が……。って、いかんいかん！ また小刻みに首を振り、美紀の可愛い顔を思い浮かべた雄二。

「喧嘩の理由は…何？」

綺麗な瞳を上げる風香。マジ、腹立つ野郎だな。大我。

喧嘩……

思い出すだけなのになんだか涙が出そう……

「あのね。他愛もないことなの。私が隣のクラスの子と話してたら、大我が“あいつ、お前のこと好きなんじゃないの？”て笑いながら言ってきたの。それが私なんか悲しくて……つい“あの子、大我なんかより断然良い”って言っちゃって……そしたら喧嘩になった……」

大我と私は小さい頃から一緒にいるからお互いの事をよく分かっている。分かっているからこそ、分からないことがある。それが恋愛関係だ。

「なるほどねえ……」

雄二は膝の上に肘を着いて頬杖する。にしても可愛い喧嘩の理由だな。売り言葉に買い言葉。まあ、微妙な関係の男女によくある現象だ。

「風香は……大我のこと好きなんだろう？」

いきなりの核心ついた発言。

「なっ！ 好きって言うか……そりゃ……好きって言ったら好き……かな。」

なんだか素直になれないよ……大我のこと好きなのに、好きって言えない……

雄二はまた髪を掻き上げて、静かに笑う。

「んな遠慮しなくていいじゃん。さっき俺が大我と由美の事を話した時。その時の風香の前に鏡置いて見せてやりたかったなあ…。顎を引いて奥歯を噛んだ風香の表情。嫉妬に狂った女の顔だったよ」

素直じゃない子を素直にさせる方法。先ず、その子を嫉妬させる。数多い女を見てきた雄二の経験が活用され始めた。

「で、風香は俺に『私が好きな奴はとっても鈍感でバカで私の気持ちに気が付いてないの。どうしたらいいかな?』って言ったよね。それから、俺は一度も大我の名前を出しじゃないよ。でも、風香は大我の事を話した」

素直じゃない子を素直にさせる方法。その二は、何気にその子を好きな奴に導いてやる。

「好きかなじゃなく。もう、気が狂いそうになるほど大我が好きなんだよ」

そして、最後は、優しくその子の心の中を代弁してやる。もう一度、髪を掻き上げた雄二。静かな笑顔を風香に向けた。

気が狂いそうな程好き……

私が大我が好き?

そうだ、私は小さい頃から見てきた大我が大好き。

大好きな大我と喧嘩……しちゃった。

大我、なんか物凄く怒ってた。

「雄二君……どうしよう。大我を怒らせちゃったよ……好きなのに

……好きな相手に嫌われるようなことしちゃった……」

泣きそうだ。いや、実際涙がこぼれているから泣いているのか。ス  
クールバックを握り締め別れ際に見た大我を思い出す。

椿と帰って行く大我。そのまま私から遠ざかっていくのが怖い。

「どうして、こんなくだらないことで喧嘩なんかしちゃったんだろ  
う。素直になれない自分が嫌い。」

きつと大我は私なんかのこと嫌いなんだろな……

ヤベ！ 泣かしちゃったよ。雄二はポケットからオレンジジュー  
スの缶を出し、風香に差し出す。風香が黙って受けとると、反対側  
のポケットからコーヒーマグの缶を出した。

「別に…喧嘩は悪い事じゃないよ。俺だって、タケルだって、よく  
彼女と喧嘩する。好きだからする喧嘩もあるんだよ。大我も…風香  
のこと好きで好きで堪らないはずだ。だから、野郎は風香を水族館  
に誘ったりするんだよ」

昨日大我からのメールを思い出した。

普段必要以上にメールをしない大我からのメールに始めは驚いたけ  
ど、その内容は涙が出るほど嬉しいものだった。

雄二君からもらったオレンジジュースを一口飲んで落ち着く。喧嘩  
するほど仲が良い。ほんとうかな？

「でも、昨日大我からメールくれたのに、当日のことまるで他人事  
のようになんにも考えてないんだよ……なんか誰かに指図されて行  
かされてるみたいになにを話しても“ふん”しか言わないし…

……」



今朝大我に当日の予定を聞いてみたら「未定」としか言わなかった。本当に行く気があるならいろいろ考えちゃうものじゃないの？

誰かに指示かあ？ 雄二の頭に由美の顔が浮かぶ。一々、浮かばせてもしょうがねえな。コーヒーをグイッと飲んだ雄二。

「風香の気持ちは分かった。彩のように…やっちゃうか？」

コーヒーをぐくぐくと飲んだ雄二君を少し驚いて見る。彼は至って真面目に話している。

「やるって…なにをよ…」

私に彩ちゃんみたいな勇氣はない。

両手で握り締めたオレンジジュースの缶を微かに奮わせる風香。何か大胆過ぎること考えてんじゃねえの？

「い、いやいや。さっき話したようなことをしろって言ってんじゃないよ。何せ、住む世界が違うから。要は、風香が主導権を握ればいい。女ってのは男の数億倍賢い生き物だ。自慢じゃねえが、俺は、いや、俺達は嫌ってほど、それを実感してる。風香、賢い女ってのは…男を手のひらで転がすもんだよ」

雄二はコーヒーを飲み干した。

「転がし方…教えてほしい？」

女の方が賢い、か

確かに、うちのお父さんはお母さんに頭が上がらないときがある。手の平で転がす？

「どうやるの？ 私にも出来るかな？」

涙が乾いた風香。表情がパツと明るくなった。ベンチの上で風香は雄二に擦り寄る。意外にノリいい子じゃん。

「大我のような一直線で照れ屋なタイプは簡単に操れる。先ずは、大我に格好つけさせてやりや良いんだ。風香。先ず、大我と一緒にしたいことはエッチ以外になんだ？」

格好つけさせる？

どういうことなんだろう。

大我とやりたいことが……

そりゃたくさんあると思ってたけど、改めて考えると悩んじゃう。でも、一番は……

「手、繋ぎたい……」

やっぱりこれ……かな？

「そりゃもう、風香、キスって言っちゃおうよ。せつかく、俺がエッチ以外って言うてんだから」

雄二は頭を掻く。期待としては、「それでもエッチ」って欲しかったなあ。

「そつ、そそそそんなこと……そりゃしたいけど……」

出来ないよ……

大我が私なんかを受け入れてくれるわけがないもん。

そんなに動揺されると、こつちまで照れる。雄二は眉間を摘まんでクスクス笑う。

「分かった。じゃ、目標はキスでいい。その為には、水族館行きを確実にしねえとな。ここが一步目だ。そこで手を繋いで、出来ればキスだ。照れ屋な男に学校みたいな所で、そんなメールの話してもまともに取り合わないよ。周りを気にしてそっけなくされるだけさ。今頃、大我の野郎は今日の傲慢を後悔してやがるはずだ。携帯握り締めて、風香に、謝ろうかどうしようか、モヤモヤしてやがるはず。風香……。賢い女、男を転がす女は、ここで男を助けてやるんだ」

雄二は風香の肩を軽く叩いた。風香にもう違和感はなかった。

キスを目標。

うん、がんばろう！

付き合ったらそれぐらいするよね。

でも、照れ屋の大我がそんなことしてくれるか……なんか心配だ。

「大我がそんなに後悔するかしら……まあ、していると仮定して男を助けるって、どうするの？ 普通ほっとくんじゃない？」

首を傾げて雄二君に聞いてみる。つと言つより、なんで雄二君はこんなに女子のことに詳しいんだらう……

風香の髪からまたいい香りが漂う。世の中に、まだ風香のような純水な高校生が存在した。それとも、俺達のような奴らが珍しいのか。感慨深く、雄二は自分の頭を撫でた。

「ほつとおいたら、大我は逃げてくばっかりだ。風香…。お腹が減ってどうしようもない時、テーブルの上にリンゴが1個ある。どうする？ 取りに行くだろ。でも、お腹を空かせているのは風香だけじゃない。そう言う場合は早い者勝ちになる」

真剣に雄二を見上げる風香。その健気な眼差し。一回あいつらに見せてやりたい。苦笑いを混じらせて、雄二はまた自分の頭を撫でる。

「男はねえ…。困った時にそつと手を差し伸べてくれる女の子に弱いんだ。俺もその内の一人。で、助けられた男は、『この女は俺が守ってやんねえと』って格好つけるんだ。大我にそう思わせよう。野郎みたいな照れ屋は間違ひなく後悔してる。証拠に…大我に電話してみりゃいい。絶対に、野郎はワンコール以内に出る」

雄二君の例えはわかりやすかった。大我は結構モテるし、クラスの子が狙ってない訳がない。そうなると、早い者勝ち…。もし、私より早く大我に告白した子がいたら…。もしその告白を大我がOKしちゃったら…。考えただけで泣きそうになるよ。

「そんなものなの？ でも、大我私が世話やくとふいってしちゃうよ。」

椿や元君は照れてるって言うけど、本当なのかな？

「でも、一回連絡取ってみようかな……」

スクールバックのポケットから携帯を取り出し電源をいれる。

風香がのって来た。雄二は少し俯いていて微笑む。

「そうそう。電話してやるといい。自分が電話しようかどうかどうしようか迷ってる時に電話かけてくれる子。助けてくれる子に男は弱いんだ。で、風香の方から、水族館行きを確約する。『日曜日、9時に家に迎えに行くから、ちゃんと起きててね』って。これでOK。野郎の嬉しそうな顔が目には浮かぶ。絶対にワンコール以内に大我は出る」

風香に手を差し向けて、雄二は電話をかける事を促した。

電話……

アドレス帳から大我の番号を出して、あと一回ボタンを押すと通話出来る。

「よし……頑張ってみます！ 雄二君そこにいてよ！」

目の前の携帯を凝視していた目を横の雄二君に向ける。

「そんな心配しなくても、ちゃんと見ててあげるよ」

雄二は笑顔で軽く頷いた。

「ワンコールだ。野郎はすぐ出る」

優しい笑顔で雄二君は微笑んでくれた。

逆にそこまで言い切られてワンコールででなかったら、どうしよう

……  
「よし、じゃあかけます！」

通話ボタンを押し、携帯を耳に当てる。横で雄二君がニヤニヤしながら見ていた。

ほら、言った通り。ワンコールで大我が出た様子。背もたれに肘を掛け直した雄二は公園で遊ぶ子供達に目を向けた。

本当にワンコールで出た。

「あつ、大我？ 今週の日曜日9時に迎えに行くから起きといてね。……えっ？ ……うん、分かった。じゃあ、また明日ねえ」

携帯を切って雄二君を見る。

「本当だったよお〜本当にワンコールで出た！ あと夜ご飯の約束もしたよお！」

野郎……。出し抜けに夜の飯まで約束しやがったか。やるじゃねえか。苦笑いの雄二は頬を指で掻いた。

「んなもんさ。男なんて。今頃、ほっとして風香に感謝してるよ。あと一つ…大我が困った時にする癖って分かる？」

雄二君はニコツと優しい笑顔で私の頭を撫でてくれた。

「うん、よかったよお！ えっと、困った時はうなだれながら髪をガリガリって掻くよ。」

これは、小さい頃からする癖。椿と探し当てた、本人には言っていないから本人は気付いてない。

「その時がチャンスだ。その時に、『どうしたの？』って優しく声を掛けるだけでいい。大我は恐らく、『何でもねえよ』ってそっけなく返すだろうけど…。内心はバリバリ喜んで。男は単純。困った時に声をかけてくれる女に弱い。いざと言う時に助けてくれる女に弱い。自分の事を理解してくれる女に弱い。大我が弱くなるって事は風香が強くなるって事。その内、大我は風香オンリーになる。風香の言う事しか聞かなくなる。風香に頭上がらなくなる。風香のお父さんとお母さんもそんな感じじゃない？ そうやって男を転がしてやればいい」

雄二はゆっくり立ち上がった。

そうか……

優しくなればいいのかあ！

そうすれば、大我はどこにも行かなくなる。

「ありがとう、頑張ってみる！ いきなり立ち上がって、どうしたの？」

雄二が振り返る。

「大我の奴、もしからしたら、キスも仕掛けてくるかもな。もし仕掛けて来なかったら、風香の方から仕掛けちゃえよ。何なら、また由美に…。いや、キスは彩の方が上手いかな。言っついてあげるよ。風香にアドバイスしてあげて。でも彩なら…。その先までアドバイスするかも」

チラツと腕時計を見る雄二。

「悪い。これから彼女とデートなんだ」

そつ、それは嬉しいけど、そんな心の準備があああ！

でも、大我も男の子だし。分かんないよね……

「うう、頑張ってみる……彼女さんとのデート楽しんできてね。私も頑張る！」

私もベンチから立ち上がり立ち去ろうとする雄二君に手を振る。なんだか、初対面なのに昔からの友達みたいな感じた。

振り返えずに、黙って手を振る雄二。あんな可愛いくて純粋な子……。何、大我の奴は勿体ないことしてやがんだ。公園の夕日に、雄二の背中が染み入り、やがて消えてなくなった。

なんか、別れ方格好いいじゃん。そのまま雄二君は姿を消した。少しの間公園でぼーとしていた。

「帰ろつと。」



風香 vs 雄二（後書き）

次回はあの子がまたしても風香にアドバイス！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4262u/>

---

廃剣 VS Bowline

2011年10月7日16時13分発行